

# 雑司が谷の魅力

渡辺憲司

## ■はじめに

私は北海道の函館生まれで、池袋とは幼い頃に関係があったわけではありませんが、池袋には、十八歳からずっと通っており、酒を飲んだ回数は池袋が一番多いと思います。以前は立教大学に勤めており、現在はひばりが丘にある自由学園に移りましたが、どうも池袋から抜けられないところがあります。

日本には、雑司が谷と似ている土地が、いくつかあると思います。ひとつは芦屋です。芦屋の自由教育には雑司が谷と非常によく似たものを感じます。もうひとつは神田です。神田のキリスト教を背景とした風土は、雑司が谷と共通していると思います。雑司が谷、芦屋、神田の三か所が、私の中で非常に重なります。

## ■「池袋の女」——崇りの女から自立の女へ

最初に話をするのは「池袋の女」です。この「池袋の女」のイメージをちよつと問い直したいと思います。

江戸時代において「池袋の女」には、民俗学的にマイナスイメージがあります。「池袋の女」とは、池袋出身の下女と密通した鍋五郎という男の家の屋根や雨戸に石が降ってきて、女に暇を出したらその怪奇現象が治まったという話です。これと同じような話は、池尻とか「池」がつく地名に残っていて、池袋から下女を雇うと崇りがあるというような説が流れていました。池袋にはそうしたイメージがつきまとっていたわけです。

また、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』という狂言の「四谷」は新宿区の四谷ではなく、雑司ヶ谷四谷町（現・豊島区雑司が谷）です。雑司が谷にも、何か怪異が起きそうなイメージがあるので、す。

ところが明治時代になって、こうしたイメージを払拭すべきだと云った人物がいます。哲学館（現・東洋大学）の創設者である井上円了です。井上円了は妖怪を研究していましたが、「池袋の女」について女性が自由を求める抗議行動だったという解釈をし

ています。つまり、池袋出身の女性は恐怖をもたらすものではなく、女性が自立するときの抗議行動として天変地異が描かれていると解釈すべきだと言いました。明治時代に井上田了は、池袋の女、雑司ヶ谷の女ともに、女性の自立的な行動が江戸時代からあったのではないか、ということ述べたわけですね。では、そうした自立的な女性が池袋や雑司ヶ谷でどうして生まれたのでしょうか。

江戸の周辺地域は、貧農層よりも自立農層が多かったです。自立的な農村形態がそこにあり、非常に豊かさを感じます。

最近、一揆があつた場所を訪ねているのですが、その中に、農村における女性の自立性というものはつきり感じとることができます。とくに池袋近郊の農業はかなり豊かでしたので、江戸時代において、自立的な女性が生まれる基盤があつたのではないかと考えます。

### ■雑司ヶ谷とはどこか

江戸時代の地図を見ますと、雑司ヶ谷は現在よりもはるかに広い地域になっています。池袋と雑司ヶ谷は、それぞれ墨引（江戸町奉行管轄）あるいは朱引（江戸御府内）の内外のどちらにあるのでしょうか。どの範囲を江戸と呼ぶのかは、いろいろな捉え方があります。「大江戸」というと、栃木のあたりまで大江戸だという人もいて難しいのですが、一般的には朱引内を指します。

池袋は墨引外で朱引内ですが、雑司ヶ谷は墨引内であつた朱引内でもあります。管轄の点で少し違いがありますが、江戸の人たちがそれを強く意識したかどうかはわかりません。たとえば、巢鴨警察と池袋警察といったように、警察はいまだに地域によって管轄が分かれています。けれども我々は警察について管轄を強く意識することはほとんどありません。それと同様に、庶民にとつては、朱引内、墨引内ということはいったい問題ではなかつたのではないかと思えます。つまり、どこからどこまでが池袋で、雑司ヶ谷なのかという議論も、あまり意味がないのではないのでしょうか。

明治時代の豊島区の地図を見ると、非常に牧草地が多いことがわかります。明治の頃にこのあたりでは酪農がさかんでした。大塚の東福寺には疫牛供養塔がありますが、疫病によつて大量に乳牛が失われ、その後学校が多くつくられました。

この広い範囲がどうして現在のように小さく分割されたのか。これは池袋、豊島区だけではなく、近代化の中で政府機関の都合でまとめられたり、分割されたりしたからです。そうした政府戦略によつて区分された土地に名前がつけられて地名となります。ですから我々は、近代化の便宜的思考から脱却して、雑司ヶ谷や池袋について、政府が決定した区分にとらわれずに考えていく必要があります。

## ■池袋・雑司が谷の土壌

小池百合子さんという初の女性の都知事が豊島区から誕生しました。このことから、池袋にある自立的な女性のイメージを感じます。こうした女性への視点は、法華教信仰とキリスト教信仰から生まれたのだと、私は考えています。鬼子母神は安産・子育ての神として信仰されていますが、母性と子育てにおける社会的共有意識を育んでいると考えられます。すすきみみずくが親孝行を視点としていることも記憶にとどめておくべきでしょう。

それから、日蓮宗が持っている抵抗意識、自立性意識も池袋周辺地域の土壌としてふまえておかねばなりません。江戸時代において、日蓮宗の法華経が人びとの心を捉えたのは、女性が救われるという点でした。また、日蓮は母親というイメージを非常に大事にしていました。母親への愛、そして母親からの愛が非常に重視されていたという点において、日蓮宗は江戸時代において、絶対的な魅力を持っていました。

東京都内において、雑司が谷には法華経の寺院が集中しています。もちろん、池上の本門寺のあたりにも多くありますが、雑司ヶ谷ほど法華経の寺院の多い地域はありません。鼠山の感応寺が天保十二年で廃院にされなかったとしたら、増上寺、寛永寺をこえる大きさを持っていたところですよ。感応寺の存在について新しい見方を提示するならば、女性たちが集って元氣を出すところがあつたと見ることもできるでしょう。また、法明寺の鬼子母神堂

の本堂は、広島藩主浅野光晟の正室である満姫の寄進により建立されました。池袋周辺地域は、女性が集う街であり、同時に女性を大切にする雰囲気法華経を中心生に生まれたのではないかと思います。

もうひとつの軸はキリスト教です。『雑司が谷物語——聞き書き・前島郁子ひと筋の道』（今井洋子著、都市出版、二〇〇一年）という本があります。前島郁子さんとは、日本女子大学の周辺に保育所を建設したり、宣教師のジョン・ムーディ・マッケレーブ邸の保存に尽くしたり、東京駅の保存運動の先頭に立った方です。この本によれば、前島さんは雑司が谷について次のように語ったそうです。

耳にした記憶では、雑司が谷は、子どもの教育にいいって。それでここに来たってことでしたかしら

この辺は一坪百円で、結構、お高かったみたい。でも気に入ったんで、無理して買ったようです、何回かに分けて。中野のあたりだと、坪十円くらいという相場だったそうですね

当時高等小学校に上がるときの授業料がだいたい一円です。前島さんのご主人は内務省に勤務されていましたが、初任給は八十五円でした。そう考えると雑司が谷の地価は非常に高かったとい

えるでしょう。

また、前島さんは「わたくし一度も軍国乙女になったことはないです」（前掲書）と云っています。この発言は、権力に媚びずに自分たちの自由を確保した人がいた証ではないかと思うのです。「私の国籍は天国にありますから」（前掲書）というのは宣教師マッケーレブの言葉ですが、こうした考え方が雑司が谷にありました。まさに「国際アート・カルチャー都市構想」の根源となるものがあつたのではないかと思っております。

### ■秋田雨雀と雑司が谷の児童文化

もうひとつ、秋田雨雀の話をして終わりたいと思います。森岩雄の『大正・雑司が谷』（青蛙房、一九七八年）という本があります。これにはいろいろな方との思い出が書かれています。その中に秋田雨雀もいます。青森県出身の作家である秋田雨雀は、舞台芸術学院の院長を務め、本納寺のすぐ近くに住んでいました。同書によれば、秋田はある種のアナーキズム的なものを持っていたけれども、非常に優しい方だったそうです。

秋田雨雀と親交を持っていた人物にワシリー・エロシエンコという人がいます。彼はロシア文化を日本に伝えた人です。アメリカから宣教師マッケーレブが、その一方でロシアからエロシエンコが入ってきた。そうした雑司が谷が持っている広がりというものに留意すべきかと思えます。ここには成蹊実務学校創設者の中

村春二さんとの思い出も書かれています。そこには子どもへの視座を感じます。

「びわの実文庫」の拠点となった坪田譲治の自宅は西池袋にありました。くわえて『赤い鳥』をつくった鈴木三重吉の自宅は目白にありました。『赤い鳥』は、鈴木三重吉が娘のためにつくった童話「湖水の女」がきっかけとなっています。児童文学の拠点、このあたりに点在していました。

鬼子母神伝承では、鬼子母神が近隣の子どもをさらって食べていたところ、それを諫めるために釈迦が鬼子母神の末子をさらってそれを諫めたという話が残っています。鬼子母神信仰の根底には子どもを自分だけでなく、社会的共有物として捉えていく考え方があります。『赤い鳥』もそうした考えから出発して全国に広がり、児童文学によつての社会的共有性をもたらしました。『赤い鳥』には、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』や北原白秋の童謡が発表されています。また、自由画教育を提唱した山本鼎は、「赤い鳥」に投稿された児童の自由画の選者を務めました。

こうした大正自由教育運動の中で、羽仁吉一・もと子夫妻によつて自由学園が創設されました。羽仁吉一『雑司が谷短信』（婦人之友社、一九五六年）と雑誌『婦人之友』、『子供之友』は、雑司が谷を象徴するものではないかと思っております。自由学園明日館はフランク・ロイド・ライトの建築ですが、あそこにライトが好きだった浮世絵の模様があることを忘れてはなりません。そ

うしたかたちで江戸の文化の影響が表れていることも非常に重要だと思います。自由学園は、新時代の女性として必要な教育を施すことを目的とする。そもそも、羽仁もと子が自分の娘が小学校で受けている教育を疑問視したことが発端でした。我々は自分の子どもや孫が本当にかわいい。その子への愛から、他者の子を愛することへと至る考え方が自由学園の発端となっています。

大正自由教育については二〇一四年度の池袋学で話しましたが、個性の尊重、池袋児童の村小学校、これは芦屋児童の村小学校と対をなすものです。そして立教大学。立教大学の校歌は「自由の学府」という歌詞で終わりますが、六大学の他の大学とは違い、立教大学だけは「立教」で終わらず「自由の学府」で終わります。戦時中は「自由の学府」を外せと言われましたが、そうした中でもなんとか粘り強く守ってきたというのも、非常に重要なことだと思います。

## ■おわりに

こうした自由な伝統を持つ池袋を自由文化都市として創造していくこと。去年の「戦後池袋の検証——ヤミ市から自由文化都市へ」をやりました。我々は、ヤミ市がある種の反体制的なものであったことを忘れてはならないと思います。しかし、その根幹にあったのは、権威に対して新たなものをつくっていく意欲や反発でした。そして同時にそれは平和への希求でもありました。

現在、池袋の街はマンガやアニメなどのサブカルチャーによって注目を集めています。こうしたサブカルチャーも、やはり主流のカルチャーへのある種の反発であると云えます。

池袋には、身を削って反発しながら創造していく文化というものがあるわけです。身を削る——「痩せる」という言葉は「優しい」の語源になっています。優しいの語源は「痩せる」——自分の身を削るということです。

太っていくカルチャーでなく、痩せていく——自分の身を削っていくカルチャーを守ること。こうした姿勢こそが、豊島区の掲げている「国際アート・カルチャー都市構想」の根底にあるものだと思います。アートとは「芸術」というだけではなく「人間がつくるもの」という意味です。人間がつくるとものとしての「アート」を考える時、人間愛というものを、雑司が谷の基本的な精神として進めていくべきではないかと考えています。

(わたなべ・けんじ 自由学園最高学部長、立教大学名誉教授)

※鬼子母神の「鬼」の表記は本来「角」のない字を用いています。